

麓

心



彌

生

誕

言頭卷

誕生の花束

久保田 隆

一發の銃聲に、地球は身震ひを始めた。大地は存分に鮮血を流し込み、海岸の底に、銅鐵の城郭を築く。激波の間には、木の葉のやうに、人間が揺れてゐる。……

さあ！開幕だ。三千呎高い山麓のステージへ、黒い涙に咽ぶ人々を、裸のまゝで登場させる。——聽て二十年。日月の大河は、地球の百面相を映して、悠然として流れてゆく。山麓の、歴史的^{ヒストリカル}生活は、生きながらに木屑^{キヤク}に成れよと教ふる。波のやうに續くシエラネバダの峰々は、超然と白雲にまたがり、俺を見よと胸をたいて、聲なき言葉で山麓の世界へ囁く。

鐵柵の邊に、すみ、深い溜息を吐く。人類の、世界の、悲劇ではないか。

だが、全身をめぐり血營のうちには、密封された暗室の中へ、冷徹な微笑を漂へる逞しい活氣が限りなく燃えてゐる。それは歴史が證明する、貴い血汐の誇りである。

——明るい山麓の誕生だ。心の桃源郷は、山麓に花束を贈る。たとへ、鐵柵を飛越へる日が、ももとせの後であるとしても——明るい山麓だ。

目

録

卷頭言

文藝誌創刊に就き

土屋天眼

寄せ書

出炭

丘南學人

美人抄（結婚風景）政岡正治

新人の意気 紺屋川幸作

詩ひとみ 樹立しげろ

クリ智流れ星 牧さゆり

漢詩 法然上人誕生圖

大橋葛城

詩 自然の樂 天眠逸人

一 二 三 五 七 九 十 十一 十二 十二

詩 静寂

丘南美子 十二

詩 どんぼ

村上心月 十三

漢詩 野球戦

倉橋寛光 十三

川柳

十四

民謡

土屋天眼 十六

夢品 木枯

十七

イ長調序曲

篠原留美 十七

短歌

仲良之 十九

下田安實

二十

笑の泉

佐々木さぶね 二十一

禮答の句

二十三

俳句

二十五

新俳壇

二十七

遠く近きは男女の仲

西郷久子 二十九

旅のうた

橋本京詩 三十

詩

下田安實 三十一

編輯後記

三十一

編輯後記

三十一

文藝誌創刊に就き

土屋天眠

今日に至る迄長い間、我等が待望の的になつた満座那文藝誌は、いよくその胎動期を経過して、この昭和十九年の新陽を期し、花々しく創刊號を出版さるゝ運になつて來に。

精神的に慰安や娛樂の缺如せる、境涯に置かれた同胞に對し、思想的食料として缺く可らざる關係を持つてゐる文藝誌の誕生を見るに至つたに就ては、當所在住の一般同胞諸氏は、定めし歡呼の聲を以て御迎へ下されたものと信じてゐます。

而して我等の文藝誌はその名を山林虎と題し、編輯主任として重大責任を帯はる、御方々は、橋本京詩君と久保田隆君との御二人で共に二世指導者として多量の將來を約束されてゐる、前途有望の青年達で、彼等は日英兩語に通じ、特に文藝方面に對し、到る處可ならざるなき天才と才能を有さるゝ點に徹し、通牒通

處の觀がある。

殊に両君は、世に先例あるが如く、同誌をして三端雜誌を以て、その生命を絶たしむるが如き可愛なき様、當初より深く此の點に留意し、周到なる注意と警戒を拂ひ、徹頭徹尾、山林虎と運命と共にせんとす。確固不拔の決心と、熱烈火の如き意氣とを以て、その經營に向つて武者振、勇ましく果出さるゝ事になつた。

その勇壯なる出立ちと、元氣旺盛なる態度と、青年に稀に見る意志の強固さとに對し、吾人をして尊敬を拂はしむに足るべき力を持つてゐる。

叙上の見地より推して、文藝誌の發行に際し、後援者の立場に置かれたる我等は、須らく、先づ自ら進んで、その經費負擔の任に應ずる義務ある事を自覺して、頂き度むと思ふのである。

猶、以上の外にも申し上げ度む事項は多々ありすが、何れ後日號を這ふて述ぶる事に致しませう。



愛

ノートより

A兄へ寄す

岳南學人

我々の凡庸な學者は基督、釋迦、孔子よりも二十倍
も物識りである。

反省を必要としない生活。それは人類の至工至善の
生活である。反省を必要としない境地に到達する
まで、人間は絶えず反省を必要とする。反省を要
しない最高の完成の姿を我々に示してくれた人を
三人数へてみる。基督、孔子、釋迦。
——だが、人類には、これが頂点であるといふ完成
の規定はない。だから、人類には、永遠に完成はない
といふことも出来る。しかし、その終点のない完成を
求め、求めてゆくところに、永劫不壊の道がある。

人生の目的を探り、人間に彼自身の価値を知ら
しめることは、科學のなし能はざるところである。

物知見から一歩を踏み出ると、文明は終を告げる。

兎器と兵隊のあらうちは、世界に永遠の和平

は訪れない。

又オホレオン、ダニエルは殺人鬼である。マルク
スは亡霊だ。

恋愛とは

永遠の愛は神自體である。

眞實の生活とは、吾人が世の人々と前にしては
なく、神の前にして、生きるところの生活である。

恋愛は愛を呼ぶ。

戀愛は、尚超克するべきである。神の愛にまでこれ
と向けてゆくことだ。

男性は抽象的である。女性により具象的である。

男の抽象的才能が、近代文明の總伽藍と築き上
げたのである。

男性がより多く機械的であるのに對して、女性はより
多く人間的である。

人間は渴せずして飲め、冬季節なしに戀する。

女は己を愛するもの、ために形造る。

— ONE AND ONLY, ONCE AND ONE ONLY — 一度だ

け、唯一度だけ、そして唯一人に對して、ストーリーベルクは言

ふ、結婚すると稀にはよき事もある。世間が私を信用し

てくれるから。又結婚とは、今日では日常茶飯事、單正

る禮式、單なる形式である。新約の實用主義的

精神によつて最もよく代表されてゐる如くにそれは

最早、人生に於ける一つの便宜であるといふ以上の、そし

て實治と教ふ一助となり、小供と主産み肉體の耕

地整理をするといふ以上の如何なる意味もない。
信仰は見解や知識の間断なき變化につれて變
化する。信仰は時と結びついたものである。

時と共に變化するものであるが、これに反して、
愛は時の外に立つ。愛は不變であり、永遠であ
る。

二人のもの、一体となるといふことは、二人のものの相互
消滅によつて、新たな一つを實現したといふこ
とである。愛をすれば死ぬ。アラスのやうに眞の
愛とは、人として死せしむるものである。古き二人のも
のが死して一つの新しいものが生れたのである。
美人が常に戀せられるのもなく、男性美の標
準に達したものが、常に愛せられるのもない。

教會や寺院を出入する所謂善男善女の

みが、常に眞理の遵奉者ではない。

眞の美德家は、自分で自分を美德家だなどい

ふへない。それ故に、彼等は美德家である。

眞の善心は自分で自分を知らない。そして誇示し
ようと努力もしない。又眞の善心は、^{あく}惡ともしらな
い。相對ではなく、絶對である。

善と惡、正と邪、美と醜——間断なく對立し、争
つてゐる。だから永遠の安心がないのだ。善と惡を
絶した善、正と邪との對立のない正。美と醜の争

ひのない善。善のみ、正のみ、美のみ——絶對である。
そこに永遠の安心待つてゐる。

大なる善美から、大なる肯定が變れる。

徹頭徹尾、神の愛に従つて生きてゐる人にとつて
は死も苦惱もない。

又、神の愛なるが故にそれは服従するといふのでは
足りない。神の愛といふことも忘れず間断なく神の
愛に従つて生きることだ。

釋迦の言葉——

身體に屬するものは凡て滅びる。永遠に不變な
ものは眞理だけだ。又この身は、久しからずして土に
歸り、形破れて心去る。肉は盡なし。我は蘇生（よ
みがへり）なり。生命なり。我を信する者は死すこ
も生くべし。凡て最も大きな眞理は最も單純で
ある。

—A 兄よ、私は誕生（に）のかた教會の門を唯の一度も
出入せず、寺詣りもしない人間である。しかし、教會
やお寺の門を一週一度出入する人々と變りなく、
基督と釋迦に違ふ。私の現實のうちに基督
が釋迦が生きてゐることを限りなく願つてゐる。
私が崇拜する釋迦や基督は即ち眞理と同
義である。 私は善人でありたい。限りなく……



美人抄

政つて治

美人といふものは誰かが好きなものであらうに違ひないが私の崇敬する美人は誰が見ても美人であると思ふものであるかどうかわからぬやうに美人の概念は個々の好み、或は時代々々の特有のものである。明治の美人は現代の人々には思ふべき時代錯誤とされ、封建時代に生きて人達に現代人の讚美する美人を見せるならば或は南蠻渡米の妖怪と思はぬ勝事と若き起すかも知れない。

現代の美人の概念は、美術史上から言へば浮世繪の歌麿に創められ、その歌麿式の美人は随らく西洋から流れ込んでき版畫の肖像と濫觴としてゐるのではなからうかと或る画家の述べた一文を記憶してゐるが、歌麿以前の奈良朝、藤原鎌倉の佛像は何論のことであるが同じ浮世繪の師宣、香信、清長あたりまでの下彫れの圓顔、小さく、つまじやかな口と目を備へてゐるタイプとはその概念と明かに異にしてゐる。

そして、すつきりと伸びてゐる頸、ツツと高い鼻、ぱちりと見開いた大きな目といふ條件を面長の輪郭の中に収めてゐる歌麿好みの美人の概念は、現代にまで傳承されてゐる。

今日、銀座街頭に氾濫してゐる佳人は所謂近代女性の七癖を得た最高の美的概念の具現であるかも知れないが、氣の弱い私などには美人だと讚嘆するよりも恐怖を先に感得してしまふ。

成程、美しい脚線、高い鼻、見開いた眼、画いた眉、朱き唇……、その余りの完全美に茫然とする。そして一瞬の後に斜線等の進歩は容姿の上にも歴然と刻印されてゐるが、あれが、女性の近代女性の真実な美の唯一の表現だらうか。

化面の美、美容院の定員、彼女の唯一の努力は鏡の前でなされる。そんな言葉と共に、深い教養の美、精神美容といふ言葉を思ひ浮べたものであるが、それはアメリカへ渡つてから一層

その感しを添へて學生の頃、東京奈良に遊んで見た。古刹に鎮座する佛像の素朴な相貌を想起しては、我々の古い祖先の愛好した女性はそのやうに卑床しく素朴な美と心を持つてゐたのではなからうかと思ひを遠い時代に遡らせたいものである。

結婚風景

三國一の花婿花嫁がマンザナーには氾濫してゐます。と前よりよりしく、ところどころですあなにもお嫁さんとお世まひになつては、私如き青書生にすら眞面目に勤めるマンザナーは實に結構な所であり、マンザナーに鎮座しますお釋迦さまもイエスさまも、法要やお祈りよりも出雲の神さまの役目に大わらわであるほど昨今のマンザナーは景氣のいい結婚オンパレードを演出してゐる。

さて、結婚。親や周囲の意見が一致すれば、顔も知らない聲も聞かない異性と新生活涯に素出した昔の帝制例は、現代の若き人々には、一種のエピソードであり、さうした勇敢さは全て理解の外である。

愛され愛される二人さへ一致すれば、直ちにさうお父さま、お母さまと具さに報告する現代の風

習に、両親や周囲は完全にシヤット・ヤットをくらつてゐる。その代り昔ははとをかせる意気持は、数百年のメリーキング、三百人の招待状、それ四組府からデンバーからと、御馳走の蒐集方面に注がれ、僅かに形式の豪華さを誇ることに充足されてゐる。

そして、マンザナーぢやから、と唱へる自肅の言葉は目隠しされて、相變らず舊態依然たり戦争前の賑やかな祝典が舉げられてゐる。

斯くして、結婚に費した借金に、新婚の苦しみ色褪せて、子供の三人も出来り頃にも苦しみ悲劇を、層々耳にした。

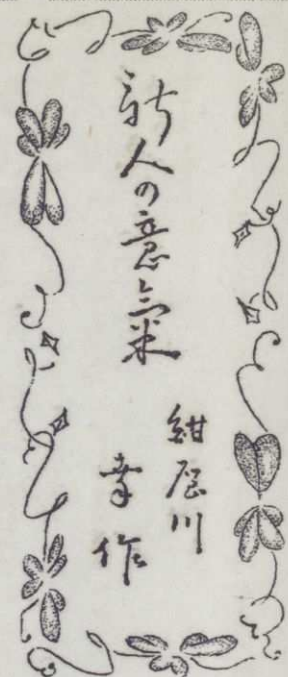
昨年から今年にかけて八組の友人の式典に臨んだ私は、新郎新婦の萬歳を呼び、美しく盛られた御馳走を戴きながら、嘗て耳にした悲劇をふつと思出し、形式はどこまでも形式だ、地の形式に負けまいと、碎く有難い親心に向つて抗議する俺は、嘆かべき異端者であらうかなど、考へてみたものである。



新人の意と采

紺屋川

著作



私は次の様な事を書くのは、愚かな自分を表すばかりか、かへつて、世の物笑いの種にならばかりであると思ひながらも筆に任せて所懐を述べたいと思ひます。

私は最近の同胞社會の世相を見たと、青年に限らず人々の道義心に缺け、その生活が一般に享樂的、利那的に傾き輕薄だ……何となくさう言つた様な感を受けらる。

試みに人心の反映である新人新聞なるものを見ても、たゞニヒラス、そこに精神的なものが見受けられない。利那的に利敵を興へるもの、又感傷的のもののみが頭を擡げてゐる。

面白いとか、甘いとかと言ふ風な趣味中心のものがとりわけ喜ばれてゐると言ふ事實は私達に何を語るであらうか？そして多分のある地味なものが時局に觸れるとか、肩が凝るとかと言ふ理由のもとに漸次

紙上から沈没を晦し、顧みられなくなつたと言ふことは私達に何を示すものでありませうか？

私はそこに浮薄に享樂的に傾き過ぎた世相の反映を見逃すことが出来ないと思ふ。

私達は出来るだけもつと落着いた力のあり思想をや觀念で以て何ものかを追究し、創作したいと思ふ。

文學は活は人生的生活であると誰かが言つた。ラ・ボオの様に、十七、八で詩的天分が一時に開花した例もあります（天才と言ふ點は暫らく度外視して一般に文學する精神はよそ目に平凡な日々々の堆積の中に形造られて行くものだと言へる時、その一日が尊い。何故なら人生の完成に少しづつ、刻んで行くからであります。

私達は過去に於て、また現在にあつて大なる試練に苦しんでゐる。しかしそれを取返すべき未來、明日言ふそれは希望の籠る日がある。

夫患の文才諸兄諸姉明日の備へ、時は今だペンを砥げ、眞に社會の求める諸問題の解答をつくれ
私は斯く呼ばせて頂ふべきです。

しかし

小説を一つ作りたしても○○號に是非寄稿してくれと頼まれたからひとへ夜漬(附)したもの、當然人を敬ふかす様な立派な作品が出来るとはありませ

ん。それが済めば筆を持つ事さえ忘れて終ふ。

新聞懸賞文藝に入賞したから、機関誌に、記載されたから——とか言ふ風な打尊的なことに満足する精神を増む。

もつと大きな目標を見詰りよ！

文學する精神は常々火山の様に言向く燃えてゐなければならぬ。戦ふことから生れ出るものだと思ひます。

以上、筆に付せて私の考へを披瀝したのですが、最漫文な、平凡なことでありますが、之を一に取るか十に取るかはかゝつて諸氏にあると思はれます。

七言 言 夕 謝。



思慕

京詩

われ君にすがらむとして傾けり

かたちを思ひこゝろさびしき

親もなくみづからもなくたゞ君を

おもへるこゝろわれは悲しむ

久しくも逢ひ見ぬ人にあふ時は

何故か知らねど母かと思ふ

たまさかにまみえて共に歩めども

言葉少くなき君の悲しう、

我が腫涙に濡れて今日もまた

幼きの頃の友を偲びぬ

亡き友の面影に似し人ありぬ

みつめてをりて 世はれにけり

つかのまの甜心にも浮ぶまぼろしはいなづきいとし 友のほゝえみ

詩

樹立 敏夫

ひとみ

哀し君の黒き瞳よ

大きく開いて

青空を見つめた時は

愛も愁も知らない

童心にかへつた瞳だった

哀しき君の瞳よ

大きく溜息して

淋しく微笑み下を見つめた時は

愛も愁も知った

現在のまゝの瞳だった。

友よ 起なう

憧憬ねたアメリカ生活

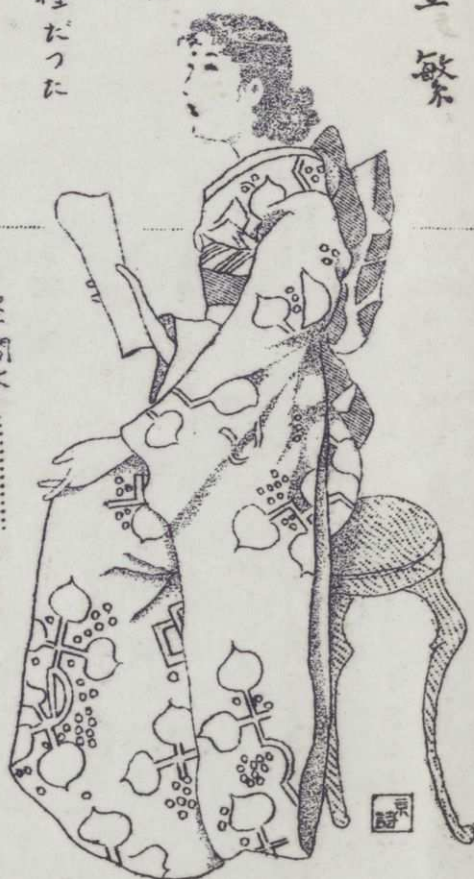
全べては

何も新も 遠い過去に走り行く

寂寂として心のしるまゝに

刃心びる奇る哀愁の吐息のみが

餘りにも厭だつて廣い



空間に 無音にも擴つて消える

何故手を舉げないのだ

何故足を曲げないのだ

友よ！ 起なう

俺達ほ若いのだもの

輝かしい未來があるんだもの

伸びよ若者!!

明朗に、

快活に、

心は青空に、

呼びかけよう



矛盾

牧さゆり

吹いてく 吹きまくれ

といふ心と

風よ!

何故にないでくれぬかと

哀願する心と

自分ながらその矛盾に

あきれてゐる

流れ星

星が流れた

一人ほつち

泣いた瞳に星が流れた

淋しい宵に

星が流れた

丁度私の

孤独の様に

星が流れた

いつはり

幼子の様に

何故思ひ切つて大聲をほり上げて泣かないのか

苦しみ。

悲しみ。

憤怒

憎悪

すべてを おしくして

その生活の全部がいつはられてゐるのだ。

文明

涙をかくして戸外に走り出た眼に

夜の風は冷にかつた 同じ家の灯が

二重にも三重にも反射した

孤独の流れをため得ずして

社会は文明と共に灰色化されるのか!

機械は間断なく動いて行く時

生活も機械化されてしまつた

涙も 義理も

消え去つた人々の身體が多く流れ出されてきた

灰色の人生は機械化された人間達よ!!

しかし どこ迄も残された小さな詩人は一人

すたれた。涙と義理と人情を愛して泣いてゐた戸外の夜風に泣いてゐた。

詩

シカゴの友へ

橋本京詩



貧しく荒涼しい生活に疲れて……

夜は眠れない床の中で

君がいた兄に……僕の氣持を傳えてくれとの

便を

僕は手を震しながら讀んでゐる。……

「不孝者！父母の墓墓を踏んで見よ」と罵つた

君の兄も——

鶴ヶ嶺湖で君の行末よかれと安んじてゐるだらう

……

たゞ一人の兄を嘆かせ、……

友人達の言葉を無視する態度を……

決して憎まうとはしない。

君の悲壯な決心に泣いた。

兄も聞けば、泣いて喜ぶだらう……

だが——決意のみ徒に悲壯であつても

志半ばにして倒れることは恥すべきだよ

僕はたゞ それを安んずる。

泣きたい様を悲しさ……

堪え難き苦痛……

女々しい心……

念情なこゝろ……

君はそれに打ち克つのだ！

男一匹、世に冷めぬ風が吹かうとも

難澁の嶮路——茨の道が横はつてぬようとも

君は未だ若い……

ひたむきに前進するのだ！

明日の光明を目指して——

……

曰一日と苦難の茨を打ち開き……切り開いて

進む人生は苦しい。

不断の努力だ！ 絶えざる精進に相違ない。

だがその難澁の道を越え渡るべく運命づけ

られたのが男だ！！

君！ 男ならば、男ならば断じて起す！

君と再び逢ふ、その日が何時であらうとも、

君の兄は、心から君を憎んではおないし、

また、僕たちの友情は壊れない。

法然上人生誕圖

大橋葛城

佛	法	翩	燦	梵	嶽	祥	振
眼	緣	翩	爛	士	神	雲	古
觀	方	丹	白	入	垂	瑞	高
機	熟	鶴	旛	懷	感	氣	僧
產	扶	舞	懸	澄	海	自	降
鳳	桑	新	綠	和	大	星	誕
兒	國	暉	樹	尚	師	奇	時

自然の樂

天眠逸人

そよ吹く風の囁きに

流れろ水の潺湲に

囀る鳥の歌の空に

や龍る自然の樂を聞け

静寂

丘南美子

淋しさに

家を出て見た。

静かに更けた夜は

唯

寂が淋しさを増すのみだつた

虫の音がする

風もないのに

木の葉が散る

絶えられなくなつて

一人歩いた。

砂を踏む

靴の音が

夜の静けさに悲しく響いた

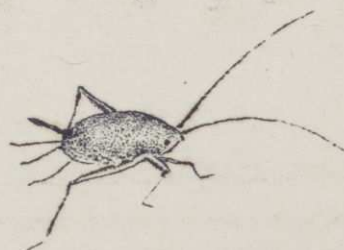
—— 静寂 ——

佇ち止まつて見上げた空に

星がまたいてゐる。—— そして

月が冴えてゐた

—— じつと動かぬ我が夜を照らしや



詩



村工心月

とんぼ

まはゆいほど

白いふたが見える

おや……目のない蜻蛉が

當もなく飛んでゐる

なんと云ふ哀しいトンボだらう

恐ろく子供達の悪戯だ……

おい、目のないトンボ

お前はこれから何處へ行く……

お前も目のあつた時は

かつたに

自由に

田んぼのすゝに

大空を飛んだだらう……

お前の心情はこの僕にはよく判るよ

お前は生きて……苦しむよりも

死んだ方が良いぜ

何故って

生きてゐるその上苦難の痛手を受けりより

お前を迎えてくれうてあらう 杏やかし

花園へ……

死は永遠の自由だ。



野球戦

倉橋寛光

兩軍堅陣期必勝

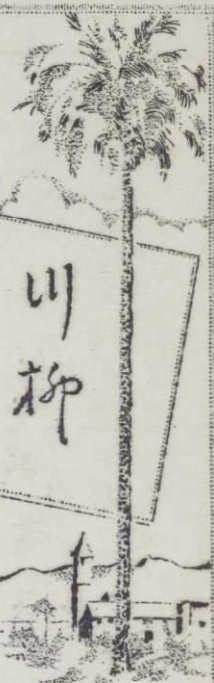
接戦数合未不決

飛球歡聲搖天地

走者盜壘如脱兔

一萬觀衆立北風

加州山麓展知戰塵



(順序不同)

海藏寺 貞子

還らない望見悟の前に旗の波
ハツキリと望見へぬ母を子は慕ひ

紺屋川 幸作

新らしい曆に希望線を見る
振り上げたこぶしもとける子の笑顔

新野 扇城

あらまーと二十年目に傘がより
砂風に聲を頼りの親子連れ

本林 桂子

親の気も知らず配所に子はたり
運命の謎を掴んでレロケート

中村 銀杏

送り出す子と明暗の柵に佇ち
満座那の歴史に残る慰霊塔

江木 美貴子

任せきり氣持に覆れて老を知り
母の手を掴んだまゝを手術台

山内 狂月

新らしいスタート餘命短かすぎ
四十燭思ひくの座りかた

仁熊 烏城

友情が無心に愛のメモに成り
日本人だけ知る幸の初日の出

辰井 王園

新天地希望を描く種一つ
運命と書いたまんまの旅日記

瀧川 道子

これだけは焼けぬ最後の故郷便り
子の便り筆の運びに知る氣遣

富田 露光

惹いた夢に明るい 今日があり
所外では出来ぬ子守と小半日

横田守平

一字路に佇つて心へ確と聞き
これからへ己か心の置所

牧さゆり

友情にそむき孤獨の今日を行く
真心にふれて嬉しい友の文

鶴田塩山

戦争はすに 還れと未に加州
十月は平和の風よ恵比壽顔

宮地青雲

弱點があつて神様こわく見へ
罪多い過去へ自分をもちあまし

深澤布袋

前説と字引位で負けてゐず
是文は時局に添ふた加子の出来

坂本秀嶺

勤勞の奉仕へ纏ふ破れ服
決勝に立つて自信の文を見せ

興儀 林虎民

五十年金に釣られて 旅に老ひ
呼び捨てる親しきで酌む膝と膝

弓削 竹雨

せめて子のおもちや立退く甘何へ加へ
魂へ強く短波の國の聲

中尾 満山

催促をする人される身にもなり
純真の子供心に夢を植え

瀧川 巴水

月雪の友に神まで居て呆れる
常夏の島の嵐に残る文字

小西 三川

立退いた先へ同居が案ぜられ
徒然のおもひ何時しか故へとび

戸田 睦羊

窓に射す眺所の月へ子の寝顔
日々遷る世相動せぬ血の誇り

速水白舟

どん底にゐて運命のやまじ顔
青春の夢は淋しく旅に老む

土屋天眠

古手紙父が此の世の書き納め
隠すだけ心の動き色に見へ

古今花嫁川柳

- ・お早うが花嫁もの言ひ初め
- ・うつむいて茶を啜るのは
- ・その二人
- ・オイ君と呼ぶ細君は貰ひだて
- ・仲直り元の女房の

聲になり



・花嫁の酌に午許を尻がり
・我家の客枕でくふ里じらき
・笑つては厭よと顔面を

結つてみる

足立鈴川

高給が目にとびりつく出所組
老巧が急場へ放つ洒落一つ

梶田楓水

運命の木だ許さない餅を食べ
からかへば子は打つまねで軽く逃げ

民謡

天眠戯作



待つておくれよ顔面は守る

せめて義のすむ迄は

満座那よいとこ一度はおいで

山の眺めは世界一

月は朧のキヤンプの道を

好いた同志の二人連れ



岩手品

木枯

條原 留美

友人Yの家で、茂樹は、澄子を紹介された。

「この方が澄子さん……」

「澄子、お行さんよ」

澄子です。どうぞよろしく。むかへ目に上げた澄子の

の瞳と、茂樹の眼が火花を散らす様にかち合った。

……

冷冽な瞳は、碧きままで澄んでゐた。そして

それは五月の……朝露の中、雲路を令んで咲く一輪の百合の花の美しさを聯想させた。

瞬間……

「美しいなあ」と茂樹は思った。

澄子は學生時代も美しい、温和しい、賢い人として

友人から愛されゐた。不自由な祖父母の下で育ち、そのスッキリで成長した身心は米國に墮落れ、父母

に墮落れ、近代文化の粹を表象した都市にあこがれて渡米したのであつた。

……

故國が戀しい——祖父が戀しい——祖母が戀しい——

その様な淡い乙女の感傷はまた、間に消された。

……

そして茂樹と澄子の友情は續いた。

しかしその幸運は、突然、蹂躪された！

事業に失敗した茂樹の父は行方をくらませた。

……山岡氏逃走!! 新聞はそれからそれへと

ゴシップを載せた。

澄子は悲しかった。父母からは、絶對に茂樹と會ふなと厳しく戒められた。その上、彼女宛の電話も

手紙も總て父母が取次ぐ様になつた。……

静かに本書の散りゆく空を遠で、ボンヤリ戸外を見詰める時、母は熱心にまた、いつゝも。

——ピクニック、映画、音楽會、スポーツ、全て彼と

楽しく味はつた頃のことどもが思ひ出されるのであつた。——

幸福の花園から灰色の人生へ轉落した悲しい心の通り場……

……

澄子の母の知らせに知らぬ茂樹の心は混乱した。

父の失敗と共に澄子の自分に對する白白しい態度、何ごとの中にもある親密な機會を何度も與へてゐるにもかかはらず、氣をへつかない振りをする冷えきつた澄子の愛情に惹く反撥した茂樹は、ようし、今に見えよ！男の意地を——憤然として立ち上つたものの、また諦めようと努力して見たものの、煩悶は彼の魂を哀愁の淵にたづませた。

一九四一年十二月七日

日米開戦

何も彼も、どん底にたき込んでしまつて

澄子はセンターに入つた。

茂樹は日系兵士として、軍服を身に纏つた。

戦争はすべてを解決したか？

戦ひは凡そ破壊したか？

悲しい澄子の涙を茂樹は知り由なかつた。

父母の意に反逆する事は出来ない！

神の心を知り！

それは佯し過ぎる程哀れな澄子の唯一つの慰めがしかなかつた。

沙漠風がすさまじい……

雪が降る……

風の便りで聞く茂樹の様子——

「茂樹さま！元氣で……元氣であつて下さい、とそれは澄子の心がふりしぼる涙の祈り聲であつた。

風よ心して吹け！

澄子の願ひを、兵營へ、茂樹さまの許へ、はこんでおくれ——

木枯は冷めなかつた。

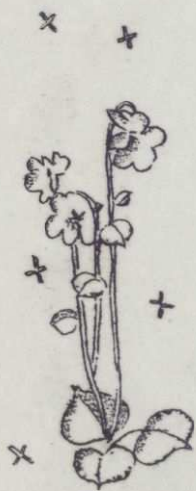
彼女の弱い心には、尚更に……

聴て来るだらう。いつか——ついに悲しみがふるやあらう。冬の後には、めぐり来る春の如く——

この様な夢相を心に描く澄子……

え、キット邂逅（あえ）るわ！キット……と

澄子は、白衣の尼僧のやうな心で……静かに、祈つてゐる。（了）





イ長調序曲

仲良之

母の切開いた道は、まだ荒削りであつたが、きれいに
ならされてゐた。

息子と末娘が天秤橋の両端を持つて、その中間に提
げてゐるのは眞珠らしい、砂利籠であつた。それには、
口の中へ入れて呑み下すであらう、眞珠の粒が盛り
れてゐる。

母は両手を揃へて、胸に取つては、春を呼ぶ女神の様
な微笑みをしたへて、眞珠の盛から息子と末娘に
瞳をうつし、やがて後の方へ満ちやうな眼差しを
送る。もう一度、両手の眞珠の盛に眼をうつした時
には、徐ろに音もなく、眞珠は地上に、今切開かれた
ばかりの地上に、敷かれて行つた。

母と息子と末娘は、長い美しいこの道がしんの
仕事を、ひととき、済んで休んでゐる。

立派でせう？ あなたの方の姉さんに、そして姉さんの
好きな、わたし達も好きなあの人に、幸福つてい
ふものを贈るには、斯うして皆でやまむながら、奴カ
しなればはいけません。えりかつたでせう、う。

えらくなつたのよ、母ちゃん。姉さん達の幸福は、
わたし達の幸福でもあるんだから——

おかし、おかあさん。わたしもうれしいのよ。おかあ
ちゃんもうれしい。

うん。かあい、わえ。……あれ、姉さんとな
の人が並んで見えた。……どう？

わーちの顔色が、とてもステキだね。
そして、あの人はわたしのニイちゃん（義兄）にな
るのよ。

姉娘は、あのひとと並んで、腕を組ませて、静か
に歩んで来た。

二人の胸は燃えてゐる。眞珠の粒をかぞへて
行くやうな二人の瞳から溢るる、涙は両頬を
停つて、ポツリと敷かれた眞珠を溶け合つて大
地にしみ込んで行つた。

彼と彼女が中ほどに来た時、大管絃樂
隊は、一糸乱れずに、山の彼方まで、緩徐調を以

て御音き、祝福と讃美を送つてゐた。

かれらが指揮者と奏者を見やつた時、胸に
せまる感慨を交々させた。指揮者と奏者た
ちは皆かれ等二人の友人ばかりであつたから、
再び、しつかり腕を組んで、春に棄つて歩み
出した。管絃樂は、いつまでも、いつまでも、彼
等の胸の底に響いてゐた。

それは、イ長調の序曲、大地の生んだもう
一つの創作である。

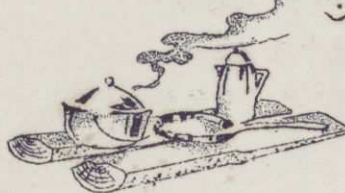
新體

短歌

二九四四・一・一五〇

下田 二 亥

胸節の痛み覺えつ
書きつけし
胸の思ひよ指の運ばず



世の中の

非心しき淋しさ一つのみ

吸ひて生くごと我を思へり

ペンを持つて

今日の夜更けを書かんとして

思ひ居りしに涙波じめり

我歩み砂の道にて這はるごと

多心ぎ行きける

今日も一人なり

思つてゐる胸の一つの塊が

あそこにあるよな

悲しい氣持！

幸福の日もありけれどこの我に

今行く道の

砂の足跡……

三行を

友に書きにし淋しさの

午後の今に残る夜なり

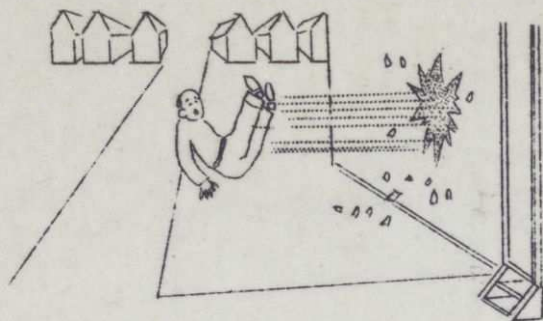
この一年

我のそばがる言葉あり

うつと言つて見る後の悲しさ……

(牛帳の中より)

もういものさ



夫たれき出 りうほにファイワ 束の噂喧
 !あだのもい弱てんなドーボータスラフ。だんな
 夫又分随奴の工大、時たて建ち家は壁のこ
 えつがやしかぬてんなだ

笑のひ泉

(一のぞ)



春の日長し



ワイフヨ貴方! いま少し
 辛 抱して、落ちない
 でさうしてよ
 急が下の花を植え替
 るまでねえ。

モダン聖書

幸福は、道樂の量に比例する。

粹人とは、野暮と野暮と知るの謂なり。

悪口の効果は、悪口と言はれた者の大きさに比
 例する。だから苦厭らない者の悪口は愚であ
 る。

友あり、時々来り亦樂しからずや

求めよ然らば與へられん——これは利己主義
 樂へよ然らば求められん——これは人道主義
 求めよ然らば與へよ——これは個人主義で
 ある。

矢じの白氷

(その二)

手つとり早く

漫画みたいな顔をした男が尋ねて来て、
「ねえ君、僕の肖像をならだけ漫画化して描いてくれないかね」と言ふ。私は何気なく「私は手を下すには及びませんよ。寫真館の方へおたのみになつては……」と言つて了つたデス。

専門的に

ある友人の家に行く。話の末に友人が「俺にだつて、俺だけしか出来ない事が一つあるんだよ。日ほう、君にね。どんな事にうう?」と新しげに聞けば、「俺の書いた字を讀む者は、ちよつとないたらうからね」と。

永久の保存法

「素晴らしい帽子だね!」いつ買ったのだい?」
彼の友人が感嘆の聲を上げた。
「さうだね。帽子を買つたのは六七年も以前の、ことだが、こに來て一年ばかり被つて、その翌年洗濯にやつてそれから實に氣をつけて被つたのだから。丁度昨日の事だキヤンテンで……」

店のもと、知らずに取つ換へて來たんだよ。

うらむらくは

「あの方は煙草もすばないし、お酒も飲まないし、勝負事もしないつて、いふのよ」
「マアなんたいい方せう」
「そんな噂をつかなければねえ、こゝろく」

さうか

共同生活をしてゐると面白い事がある。
或る夜、暗い中で起き上つた一人が、マツケを磨つて部屋中を見渡し、やつと安心したやうに、床にもぐり込んだ。片方の男は不思議に思ひ、「一體どうしたんだ?」と、なアに、電燈を消したかどうか、一寸しらべたんだ。

道は吾が夫

醫者「御主人の病氣は、此頃流行り出した急性感冒ですから御注意下さい」
奥さん「あら、此頃流行つてゐる病氣ですの、まあ好かつた、吾等に主人のことだから流行おくれの古い病氣かしらと思つてとても心配しましたわ、これで安心、近所の人達に言譯が出来るんだもの、なかくの賢い夫人」

禮答の句

さ、びね

返し

木公の身に

恥しい赤かむり

露光の

「姥捨の話に残る世の露見。」

返し

姥捨の話に老老(おいほれ)の値も勝り

鳥城の

「常命に拾年越した今日の幸日の句へ

返し

其の序(うしろ)天井知らずに欲心を張り

谿川の

「人生の一步六十路へ踏んで出る」の句へ

返し

踏んで出る六十路に軽い意氣の脚

青雲の

「定命は百と定めぬ赤頭巾」の句へ

返し

赤頭巾かぶれば百はちと足らず

狂月の

「赤頭巾祝ふ笑顔が眼に浮び」の句へ

返し

祝はれて眼尻によせる齢の浪

白舟の

「赤頭巾大地の聲に若がへり」の句へ

返し

收穫がすんで落穂に恵まれる

さゆりの

「還暦の祝ひに晴れてたかい空」の句へ

返し

天下晴れて公卿と呼ばれる齢となり

道子の

「清らかな心にかへる赤頭巾」の句へ

王國の

「彼心々として廻りして意氣を見せ」の句へ

返し

南洋へ野心をのばす若い意氣

幸作の

「尊公卿の六十坂を越えろ幸作」の句へ

返し

「尊公卿と呼ばれ下の字にちよと悲哀

睡羊の

「赤頭巾まだ青年の意氣で起ち」の句へ

返し

意氣にぶり半白かくす赤頭巾

守平の

「今歳を正座へ祝ふ赤頭巾の句へ

返し

祝はれて過去に悔あり赤頭巾

哲民の

「再出發雄々しく大地踏んで立ち」の句へ

返し

踏んで立つ大地はせまし柵の中

巴水の

「百歳へ餘命を数えど赤頭巾」の句へ

返し

兼好はいやなやつだと赤頭巾

還曆公卿としての口先

佐々木さぶね

行つてもいゝけど

禁制地帯

いつに開けるか

エバグリーン（墓地）

全

木音

来いと言なとて

西へは行かぬ

水卦返りの

若い旅





俳句

マシザナ吟社例會句抄

當季雜詠

岩下 蘇村

哨兵に落葉時雨の一としきり
煮凝や厨に暗き豆電ぢれ
寒雀日脚さし込む厩口
寒紅やほのかに老の身だしなみ

安田 北湖

寒紅の娘に取巻かれ老所長
菊乃木の正月ハリーの紅や冬の山
セウの水たゝえしゲムや初明り
朝々のツツクの施米寒雀

田中 素風

針の糸子に通させや春著縫ふ
子の便り春著と共に居きけり
カタコゲに集る顔や春著還る

煮凝の又著先と逃けにけり

山口 牧村

セウの山眠るふもとや収容所
夕暎の雲たゞへり冬の山
寒月や野末に白き慰霊塔
初孫の寫眞も添へて加賀狀かな

上村 若舟

相寄りて眠れり山や牧の果
帶雲の消えて明けゆく冬の山

池永 肥州

それくの春著の顔に母甘めり
寒紅や鑪に立てり子の笑顔
煮凝と指で味見り留守居かな
外れ彈や命中彈や雪合戦

村上 聖山

床下と飛立つ雀や雪の朝
叫びかはす鳥や初日の屋根越に
サ落葉喃み款切ればさみ薄氷
鳴きつれて翔る鴉や梨落葉

土屋天眠

子を抱きし母も加はる日向ぼこ
聖誕や一家目出度く打ち集む
出征す兵も加はり雑煮かな
古稀にして色紙に一句筆始

石井牛鳥

新玉の息吹きかけて目鏡ふく
枯枝にいがみかゝれり冬の月
かさこそと落葉をあさる小鳥かな
何の草枯れたるまゝに香りあり

望月奇風

瀧岩殿をつかんで重るゝ氷柱かな
子等樂し眺むる親もクリスマス
静かなる隣部屋より風邪の鼓耳
雪ボール投げて誼の年始かな

山崎琥珀女

冬の蠅造り牡丹にうこさる
いと小さき冬の蠅かや飯を盛り
ピーコト並ぶベンケヤアトシヨ
むさくの晝の句會や冬臘

永井平歌

スカウトの打つ大太鼓明けの春
春著の娘ヨブレの打者に賭けにける
マングアに誕生れし汝れや今朝の春
さざはしに来てふくれ居り寒雀

富田露光

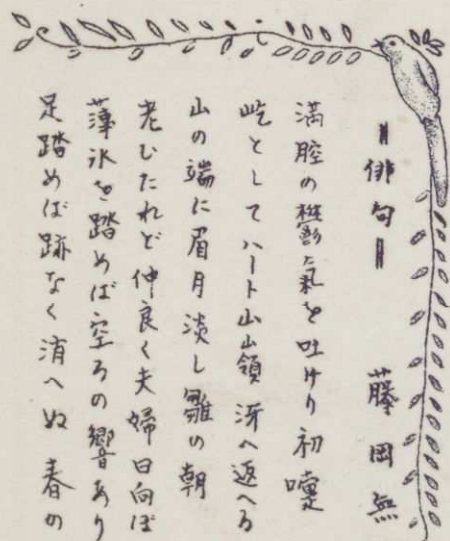
急ぎ行く人すれぐに花セージ
枯葉の葉鳴りの中や鳥交り

仁熊鳥城

くつきりと水着の後 のありにけり
枯芝を踏みばザク／＼ 朝の空相

俳句 藤岡無隠

満腔の熱氣を吐けり初噓
屹としてハート山山嶺 河へ返へる
山の端に眉月淡し雛の朝
老いたれど仲良し夫婦日向ぼこ
薄氷を踏みば空ろの響あり
足踏みは跡なく消へぬ 春の雪



新俳壇 その一

おもかげ

外果有子

門に出て送つて呉れたおもかげを母の日
樹を植えながら歸期を語つてゐる
踊つてゐる娘らの衣裾で涙ぐんでゐる春の夜
ポプラの葉木の子よぎ人間の動きをみせて夕へ
ある風がならして碧い空も白い山嶺も映やい窓



荒野の月

戸田 明幸 葉

寒
家空星が瞳く白衣小足に歩み
山犬吠えまた吠え荒野の月が山端
黙々木株彫る数々の音消えて暖日
背いて旅立つと涙で見送る親で
眠休まず沙漠また新しき墓一墓



新俳壇^{のそ} ニ

餅のかび

山根草風

朝は雪の山から明けて来るタオルと楊子
冬木へ雨の雪の雪と降つては落ちる
はんに私に私の妻がある破れた靴下縛つて居る
冬夜勞れた目かたと年にある生命線
家計簿の赤字も枯は活けてある餅のかび

牡丹雪

同村眸子鳥

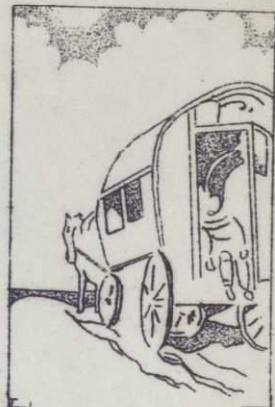
空へくちぶえ高原で寝てゐる
戦局の進展山に圍まれ寝たり起きたり
雞鳴山のきは白んでくるよ午には手袋
牡丹雪が頸を締め親御を連れなごる
鳥は黒いもので雪となりけり

山かけ

佐藤知星

風のおだなは陽は落ちるたびの寒い山かけ
旅立つ挨拶にくる吸殻と言譯とが残つてゐる
飛行爆撃機のニースもさむい星が出てゐる
吹くだけ吹けばやま風の夕陽の親子の影
むしがしらせたと云ふ人の話も星が流れる





遠くて近き
は男女の仲
西郷久子

私達はア
メリカにある
からと言つて
レディーファ
ストつまり
女尊男卑

そして非常な人倫の破壊者の如く
にその行爲を非難したてはありま
せんか。

それに引き續いて、私たちは二

松しき筆をも顧みず貴重なる
紙面を汚すのではなかつと思ふが、
たゞ筆にまかせて、走り書き、聊か
なりとも參考になれば筆者の幸
甚とする處であります。

の習慣に決まり、男性を侮辱す
るのではありませんが、男性が私に
おに對して粗暴であり、薄情な又
冷淡な態度を改善して頂にござ
たいと思ひます。

世の若き男女は、共に食ひ、共に談
じ、共に戯れる。而も飽きでも互
尊重を拂ひ合ひ、飽きでも關係を
清潔に維持して、誤りのない生活と
途つてゐることを真似るべきであ
ります。

私は男との交際に就くの意
解を根絶しようと思ひますには、先
づ第一に餘り兩性の區別をせぬ様
にすべきだと思ひます。

男性に女を求めたいことは、節操、
溫柔なる思想を發達せしめ、言
ひ續へれば、悦ぶべき時に悦び、悲
しむべき時に悲しみ、私たち女性
を扶けて共に提携し合ふ事である
と思ひます。

だからと言つて西洋風になつて
つまり女尊男卑、或になれと言ふ
のではありません。男女の區別を
明確に區別せず、寧ろ自然の親
知力を善導して、無邪氣な快
活に交際するに他ならぬのであ
ります。

私達歸米二世は、彼の有名な
「男ヤセオにして席を同じうせず」と
言ふ傳教士訓が甚だしく男との
區別を峻厳ならしめたのであらうと
思ひます。

私は時として、女性と男性と相違ん
で歩くのを厭し、目と振り返つて
見る人達を見交ひます。
疑しい眼で以て見送のみなら木だ
よいとして時には「畜生」などと侮辱の
言葉を浴せかけたり致します。

勿論、その間には私たちの徳義心
また男子側には、私達に對する

威厳もありませう。

しかしながらその主とする原因は、
男々無差別主義の効力に歸すと
ころの多きを認めなければなら
ないと思ひます。

日本の習慣を言へば、男と女が一所
に居れば直ちに戀を聯想する
卑しい傾向はあります。

私達歸米ニせは宜しく戀と親愛
の區別を明らかにしなければなり
ません。

親愛は如何程近くてもいい。
しかし戀は出来るだけ遠い方がよ
いと思ひます。

男女の親愛は、一生續けてもよ
いが、しかし戀はなほ一度であり
ます。


私は男女に對する社會の習慣
が改良せられると同時に、青年男

女の皆様と共に努力一番されて、
新定義を基に成立せられんこ
とを希望する者であります。



旅のうた

橋本京詩



古日記より（ハンテントン海畔）

潮風に頬を吹かせて佇めばハンテントンの海はよろしも

● 朧夜の空にこよもし今宵この穩しき浪も寂しきになりに

● 夕なづむ光りと溶じていつべにか歸りやくなり水鳥の群

キヤピストす深山にて

そま人等今日を來りていとなみす煙あげたり山の小家に

日ねもすを野良に過せばたまさかの休み日今日は谷あふに聞ゆ

メキシコの國境

夕がればわがらに歸る鳥を見てさだめなすわが家をさびしむ

わびぬれば遠きあすの灯を数へ疲れしわが身なぐさめてゐる



溜息

下田 實



心の壺に

奥の水溜りに

おつとたまつた

一つの哀れな溜息

誰にも言へない頃の

心の壺の暗い壁に

そつと残つてゐる

悲しい思ひ出

忘れられぬ儘の

傾かれても

知らない壺

たまつた冷めたい水は

何時の日なくなり

それとも泪の後かしら……

小川の邊り

眺め居り

小川の邊り

我思ひ

流れの如し

過ぎ行けど

猶も映つれる

瘠せ行きし

次女なりけり

手にとりて

掬む術知らず

たいすみつ

眺め居たりき

幾人を

かくて今日より

泣き濡るゝ

小川の邊り

孫 傳

後 記



HAPPY NEW YEAR.

おめでたい。今年も相變らず頼むぜ。

京詩君と私は、改曆の祝意をしつかり握りしめ、
たふとふに傳へ合ふ。

どうだ、雑誌を出さうか。

いいね、賛成だ。

呑氣者の私達は

唯、これだけの言葉

で新春と共に山林

の發刊にスタートした

のである。

物言へば、唇は寒いと

いふが、物言へば唇が紫

色に變る現下の状態に於て、この未曾有の歴史的
山林の生活の金字塔を建設してみたい。

豊かな趣味性に恵れてゐる京詩君を頼みにし
て、ともかく私達の希求は叶へられた。

京詩君は才人である。

たとへ、獨力でやるとしても、山林展、くらむの紀念
塔を建てる力量を持つてゐる。

例へば、廣く細く維する文學の紀念塔の建

設と言ふ所期の目的は、各方面の愛筆家と
知つてゐる京詩君には容易に聯絡をとつて實

現出来る。

私達の意圖に對して、誠意

ある力添へ下された寄稿諸

君に、心から合掌致します。

既に、私達は二冊刊行の計畫

を進めてゐる。

より以上のもの、より高きものへ

と自己を進める心を瞬時忘

現したものだと思つてゐる。(隆)



- 。論文
- 。創作・小品・隨筆・詩
- 。短歌・俳句(新體)川柳
- 。民謡
- 。締切 一月三十一日
- 。宛名 橋本京詩 三六〇四
- 。久保田隆 四〇二〇四